



# 診察室の午後

白浜はまゆう病院  
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

2年半ほど前まで、大学で手術や外来診療の傍ら、腎臓がんの免疫療法について研究していた。

転移した腎臓がん、インターフェロンという免疫を活性化する薬を使うことがある。16%の人に効き、まれにがんが消えてしまうことがある。腎臓がんに対して何か強力な「がん免疫」が働いたと説明されているが、その仕組みは分かっている。少数例に何が起きているか知りたかった。

一般に、いろいろながん細胞の表面には、そのがん特有の「がん抗原」と呼ばれる目印が付いていると想定されている。目印を感知できて、がん細胞を「敵」と認識し、攻撃・破壊する

リンパ球(キラーT細胞)が増えれば「がん免疫」が働く。ところが有用な「がん抗原」は、まだ完全には分かっていない。

がんの患者さんの血清を集めた。がん免疫ができた人の血清の中には「がん抗原」に対する抗体ができていた。その抗体と反応する腎臓がんのタンパク質を探し出す作業が続いた。年末年始の休日や連休は、時間のかかる実験に充てた。まるで世間からとり残されたように感じた。

得られた「がん抗原」は、驚くべきことに、「免疫に

## <48> 未完の仕事

インターフェロンがよく効いた幸運な人では、腎臓がんの「がん抗原」を認識して攻撃する確実な「がん免疫」ができたという仮説を立て、その「がん抗原」が何であるかを突き止めることにした。

まず、医局や関連病院の先生にお願いして、インターフェロンが著効した腎臓

ブレーキをかける分子」を活性化するタンパク質であった。まさにがんを守るものだ。この「がん抗原」の断片で、リンパ球を刺激したところ、ほとんどの人で、腎臓がん細胞を強力にやっつける「キラーT細胞」が

ほとんど増えた。腎臓がん治療のための新しいワクチンへの道が開けた。

がん治療学会では優秀演題賞を頂いた。大学から特許出願をし、製薬会社各社の開発の方とお話する機会を得たが、「患者数が多い前立腺がんでないかね」とか「基礎研究からの自社開発は行っていない」という対応であった。ベンチャー企業の研究成果を買って時代になっていった。

ある時、製薬関係の業界紙に私の研究が紹介され、それを読んだ某製薬会社の社長さんが、大学の私のもとに社員をよこした。しかし、当時その会社では大型新薬であるがん免疫治療薬の発売を前にして、一臨床医の研究は開発の対象とされなかった。この研究は、いつの日か患者さんのお役に立つと信じている。

◇ おこたわり 「診察室の午後」は2月から火曜日の隔週に掲載します。次回は14日付です。